

「私の平成時代」～振り返れば病気がちだった？

<よく飲んで、よく働いたよ！>

昭和 63 年 (1988) 40 歳、3 人目の子供が生まれた。その子ももう 30 歳。思えば「平成」は、仕事も家庭も超多忙であった。仕事もしたが、飲むのも仕事のうちだった。その頃家を新築し、引っ越した 2 年目の平成 2 年 (90)、新参者なのに町内会長を引き受けさせられ、様子がわからないまま町内会の仕事に追われた。勤務先では働き盛りの中間管理者、通勤電車が休憩時間だった。



平成 4 年に米国赴任 (フィリピンに次いで 2 度目の海外転勤)、帰国後は 2~3 年毎に転勤を繰り返し、平成 13 年 (01) にインドに向かった。転勤は全て家族同伴した。平成 17 年 (05) に帰国すると折からのインドブームで、本来業務に加えてインド経済講演会を 2 年間に全国各地で 30 回以上もやった。

平成 21 年 (09) 3 月末にジェトロを定年退職した。

写真は平成 20 年 (08) 9 月に還暦同期会に行く途中で撮った。その 2 か月後 胸におかしな動悸を感じ、負荷検査をしたら心電図の線がクロス、血液が逆流しているという。冠動脈が 99%詰まっていると診断され手術を受けることになる。

<暴飲暴食の報いか>

「平成」を振り返れば、意外に多くの病気や怪我をした。まずは 30 代末に尿管結石、40 歳代クモ膜下 (今も小脳に小さな瑕疵がある)、60 歳狭心症 (冠動脈ステント手術)、定年退職後も海外技術者研修協会に 6 年、日印協会に 2 年務めたが、その後は非常勤でインド関係の仕事をしている。ところが、古希を前に再び変調を来たした。60 歳代末に脛骨骨折と前立腺がん (小線源・放射線治療) である。

骨折以外は、いずれも検査入院 2 泊 3 日、治療・手術入院 3 泊 4 日で乗り切り、外見は健康そうに見えてもパイプが詰まっている。病歴について主治医に話すと、「何事もなかったように生き延びているのは元が頑健だからである。まずは両親に感謝しなさい」と言わ

れる。暴飲暴食が原因だと自覚している。生き延びているのは、全ては医学や医術の進歩のお陰だと感謝している。

胸に異変を感じる2か月前の還暦同期会で血管外科医の折井正博君(5組)と名刺交換していなかったら、そして彼に紹介してもらった病院に直ぐに行かなかったら、今頃はあの世だったろう。また、前立腺がんは大した病気ではないと言われるが、もし骨とか内臓に転移していたら大変だった。麻酔して手術ベッドに横たわりながら、驚異的な医学・医療とそれを支える最新の機械工学技術、光学技術、コンピュータ技術の進歩を、手術中のモニターを通して実感しながら、昭和の時代であったら大手術・長期入院を要する病気が、平成の医学・医療技術の格段の進歩のお陰で短期間の入院で済んだ。

<七十にして>

「平成」は「地平天成」に由来するとか、しかし、「天変地異」の連続であった。ソ連圏の崩壊は世界の平和ではなく、地域紛争激化とテロ横行をもたらした。リーマンブラザーズの破綻は世紀の人災。阪神淡路大震災とオウム事件は世の末を連想させ、スマトラ沖地震・津波、東日本大震災・大津波に福島原発事故と変異が続いた。

少子高齢化は日本にとって致命的な社会問題となっている。高齢が悪いわけではなく、問題は少子化だが、対策は進まない。平成の30年間、日本経済は長期低迷と言われながらも、都市機能は向上し都市の外観も変貌を遂げているが、高度成長を支えた社会インフラは老朽化しており、人口の都市集中と山村部の限界集落化が進んでいる。

そんな中を、我々団塊の世代はあと5年、揃いも揃ってみんな後期高齢者になる。私事ながら、戦中・戦後の混乱期を生きてきた両親は、母が平成19年(07)秋に83歳で、父が翌年の春に91歳で他界した。せめて母の年齢まで生きないと親不孝だと思うし、少しは世の中の為に恩返したいと思う。しかし、今さら限界集落で農業や林業はできないし、建設機械も操れない。

インドとの縁は仏縁か、今もわずかながらインド関係の仕事をさせてもらっている。新元号「令和」の時代は、自分にとっては余禄のようなものだ。「余禄の人生」をいかに過ごすか。七十にして「出来ることしか出来ない」と自覚し、「縁」により知った「インドの砂漠緑化に尽力したグリーンファーマー杉山龍丸」を、日印関係史や世界の砂漠緑化・環境問題等の分野で次世代の研究者に正統な研究テーマであると認識してもらいたいと考え、史資料の解読に取り組んでいる。

(2019年4月7日記)